

まちと人をつなぐ中間領域に対する認識とその特徴

－ 郡上八幡の町屋での実践を通じて －

1X20D068-1 藤本秀哉*

軒先や縁側といった中間領域は時代とともに減少し都市での偶発的な人と人との関わりが薄れている。町屋が連なるまちなみを有し、多様な中間領域の使い方と様相が見られる郡上八幡で活動する、早稲田大学景観・デザイン研究室サテライトラボ「saoco lab.」では他者に開かれた中間領域を目指した実践活動を行っている。本研究では、中間領域の設えと活動に着目したアンケート調査を実施し、その統計分析を通して地域住民の saoco lab. との関わりとその印象の関連から saoco lab. に対する認識の実態と、それに関わる主体の特徴を明らかにした。その結果、印象が具体的な主体は、saoco lab. の設えや活動の認知度が高く、訪問経験があること、主体自身の中間領域の利用傾向の相違が印象の具体度に対応することが示された。

Key Words : 中間領域, 認識, 郡上八幡, saoco lab., アンケート調査

1. 序論

(1) 研究の背景と目的

人と人との関わりは時代の潮流に伴って大きく変化してきた。かつて、軒先や縁側のような内部でも外部でもある曖昧な領域、すなわち中間領域において人々は自然発生的にコミュニケーションを交わしていた。しかし、近代に入りプライバシー意識の高まりや土地の所有状態の明確化などが起因し、空間の境界が明確に線引きされたことでその曖昧な空間は減少し、同時に都市生活において偶然に人々と出逢う機会そのものが稀有なものになっている。

そのような中間領域が残されている都市として、町屋が連なるまちなみを持つ岐阜県郡上八幡がある。町屋と街路の間に生まれた中間領域の様相には個人の生活が表出し、生活に根ざした利用が窺える。早稲田大学景観・デザイン研究室は郡上八幡の一軒の町屋にサテライト研究室として saoco lab. を立ち上げた。その中間領域において、活動風景が外から見られるようふるまいを展開し、まちに開かれた空間であることを目指した実践活動に取り組んでいる。

こうした開かれた中間領域のあり方を考えるとき、その空間構成だけでなく、そこに暮らす人々の中間領域でのふるまいや持ち合わせた感覚についても実態把握がなされるべきであり、中間領域を取り巻く主体に迫ることが重要だと考える。

以上の背景より本研究では、saoco lab. での開かれた中間領域を目指した調査者自身による実践活動を通

じて、中間領域の設えと活動を手がかりに、地域住民の saoco lab. との関わりとその印象との関連を明らかにすることで、saoco lab. に対する認識の実態を把握する。次いで、その認識に関わる主体の特徴を明らかにする。

(2) 既存研究の整理と本研究の位置付け

建築・都市分野において、商業地の店舗前空間のあふれ出しや住居まわりの公私領域の境界部分などその中間領域に着目した研究は継続して行われてきた。公私の境界部分に対して人々が抱く認識に着目した研究として、一海ら¹⁾は、住宅街路の公私間の仕切り方が与える心理的影響を、私的立場と公的立場の双方から中間領域に見られる物理的要素との関わりに着目して考察している。中間領域の構成要素に着目しそれらを体系的に示す研究として、渡辺ら²⁾は、中間領域の類型化を行い、その構成要因とそれらの性格を検討している。

本研究は、中間領域に対する人々の認識について扱う研究に準ずるものになるが、調査者自身が中間領域の設えや活動を行う主体であることに独自性がある。活動主体の施した設えと活動の意図やそこで経験等を踏まえ、当事者性を持ちあわせて調査し、活動をのちの活動に反映できると考えられる。

(3) 研究の方法と構成

本研究では、調査者自らが実践者となり、中間領域における設えと活動を展開し、これに関わるアン

*早稲田大学創造理工学部社会環境工学科 景観・デザイン 佐々木葉研究室 学部4年

ケート調査の統計分析を中心に進める。2章では、saoco lab.が位置する郡上八幡と実践活動の概要を整理する。3章では、認識を扱う基礎的な調査として、観察調査により saoco lab.近傍での地域住民の行動を把握し、その行動主体の特徴を明らかにする。4章では、周辺地域の住民を対象としたアンケート調査の基礎集計と統計分析から、その回答の傾向と特徴を明らかにする。以上に基づいて、実践活動を通じた人々の saoco lab.に対する認識の実態とそれと関連する主体の特徴を概括し、最後に開かれた中間領域のあり方について考察する。

(4) 用語の整理

既往の中間領域の用法について整理する。オランダの建築家ヘルマン・ヘルツベルハーは中間領域を「異なる要求を持つ領域の明瞭な境界線をなくす鍵」として捉え、そのような空間は公私の両者の出会いと対話を可能にするための空間的な条件を本質的に構成していると述べている³⁾。都市分野における既往の中間領域の捉え方を整理している陳ら⁴⁾は、「閉じた空間」である私的空間と「開かれた空間」である公的空間、その一体化することのない両者を連結するのが中間領域の役割であり、両者が一体になることでその場所に特有の生活空間が生み出される、という論が都市における中間領域の捉え方の典型であると述べている。

本研究においても、中間領域は、公私の空間の厚みを持った境界でありながら双方の関係を取り持つものと捉え、ある人のふるまいまたは建築の空間構成によって生み出され、公のまちと私的な個人をつなぐ特徴を持つと考える。

2. 対象地域と saoco lab. の概要

(1) 対象地域 郡上八幡の概要

研究対象地域である郡上八幡は、岐阜県郡上市の中央に位置する八幡町の中心市街地の通称である。八幡町は郡上市の中心部に位置し、山に囲まれた中、3つの河川が合流する位置に形成された城下町である。交通軸について、主要道路が中心市街地を取り囲むように外周道路を形成しており、これにより市街地内部から通過交通を排除し交通混雑の解消と安心して歩ける道路づくりを行っている。市街地は、吉田川によって南北に分かれ、それぞれ北町・南町と呼称される。北町の一部は重要伝統的建造物群保存地区に指定されている⁵⁾。伝統的な建築形態である町屋が連なるまちなみを有するが、時代と共に商売の変化などを要因として開口部の減少や引き戸の

ドア化など、密閉性を高める方向への変化が見られている⁶⁾。

(2) saoco lab. とその実践活動の概要

saoco lab.は、岐阜県郡上八幡の一軒の町屋に早稲田大学景観・デザイン研究室の分室として2022年5月に開設したサテライトラボである。その活動は、地域住民への研究室の成果を共有する場として、展示やオープンラボを開催している。活動運営は同研究室の構成メンバーが主体である。

saoco lab.の位置図を図-1に示す。場所は、郡上八幡のメインストリートが郡上八幡駅方面に伸びた先にある新栄町（旧町名）の東端にある。このエリアは観光客が多く訪れる中心部に対して住宅がやや多い地区で、その中でも saoco lab.はまちの中心部の最も近くにあり、吉田川に流入する武藤洞と呼ばれる小河川とそれに沿う小道に面した角地に位置している。前面道路の幅員が建物付近を境として狭小になり、舗装色が変化することからも町の中心部への玄関口のような場所になっている。

活動の拠点でもある建物は、間口3間奥行き9間ほどの2階建の町屋である。改築以前は間口の全面を開放できるガラス引き戸の伝統的な町屋のつくりであり、開口部が減少した形になった現在でも扉が引き戸であり、土間が残され、郡上八幡に広く見られる町屋の建築形態を保持している⁷⁾。

saoco lab.の土間は、これまで郡上八幡を対象地に執筆された研究室の研究論文や町屋の紹介などといった主な活動のための空間になっている。その活動において、地域住民との日常的なコミュニケーションは重要であり、saoco lab.は自由で開かれた場であることを目指している。そのための実践として、軒下では設えを施したり、活動風景が通りから見られるように活動を展開している。表-1に土間と軒下での設えや活動の概要を合わせて示し、図-2にこれらの具体的な空間配置を示す。



図-1 saoco lab. の位置図

表-1 設えと活動の概要説明

軒に吊り下げた赤い消火バケツ	華花
saoco lab. に在空中であることの印として、垂木の並ぶ軒裏に赤い消火バケツを吊り下げている。	第三者の介入ができるきっかけとして、黒板の脇にペットボトルをぶら下げて草花を活けている。
外壁に設置した黒板	saoco lab. での活動に関するポスター
滞在者の名前や滞在予定日などの情報のディスプレイとして、外壁に黒板を設置し書き込み、まちの人に伝える。	saoco lab. の活動についての説明や、季節ごとのイベントの告知、地域のイベントの宣伝として、窓ガラスにポスターを貼り付けている。
戸と窓の開放	軒下空間での活動
日常的な動作として、気候に応じて窓と戸を開放している。	日常的な活動として、軒下にテーブルや椅子を設置し、その場で過ごしている
研究成果として卒業・修士論文の展示	日常的な活動スペースとしての利用
研究室での郡上八幡を対象とした研究論文を展示している。	土間にテーブル・椅子を配置し、土間を日常的な生活空間としている。
三時点まちなみ絵巻の展示	郡上竿とそれに関する新聞記事の展示
研究室の研究成果物として、1999年・2010年・2020年の三時点で撮影したまちなかの建物のファサード写真を横に並べ作成した絵巻を展示している。	saoco lab. の町屋の元居住者が卒職人であったことから、町屋の紹介の一部としてその職人が制作した竿とそれに関する新聞記事の切り抜きを展示している。

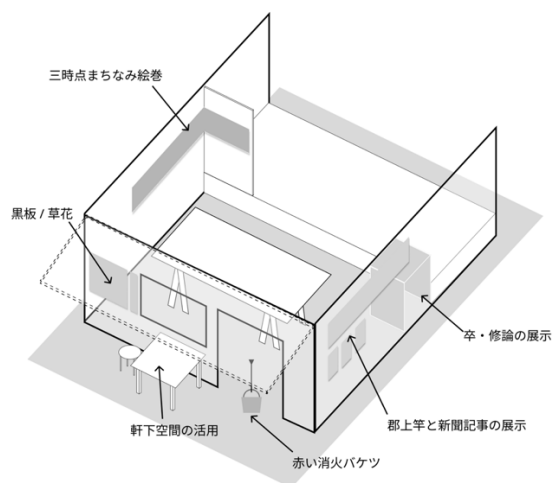


図-2 saoco lab. 一階部分の設えと活動空間の図

3. saoco lab. の近傍における人々の行動実態

(1) 観察調査の概要

saoco lab. の近傍に居合わせ、実践活動を視認している主体の特徴について把握するため、saoco lab. の軒下を観察場所として、通りを通過する・滞留する人々の行動、調査者との挨拶や会釈のような相互行為を、発生時間とともに網羅的にメモとして書き留め、表-2 に示す通り計4日間調査を行った。

観察調査から得られたメモを元に、観察された行動を抽出した。その際に、「近傍」を「向こう三軒両隣の範囲内の建物」と定め、行動主体を「近傍に住まう人」、「近傍を訪れる人」、「近傍を通過する人」の3つに分類している。それぞれ分類された行動について表-3 にまとめる。

(2) 観察された行動の考察

観察された行動から捉えられる、saoco lab. を視認していると考えられる主体の特徴について、以下の二点から考察する。

表-2 調査日程と諸条件

日付	天気	時間
9/25 (月)	曇り	16:00~18:00
9/26 (火)	晴れ時々曇り	8:00~12:00, 15:00~18:00
9/27 (水)	曇り	8:00~13:00, 14:30~18:00
9/28 (木)	曇り時々晴れ	8:00~11:00, 15:00~17:00

表-3 分類した主体ごとの観察された行動

近傍に住まう人	外出・帰宅 住居の庭先での活動 住居の軒先での活動
近傍を訪れる人	ごみ収集場所へのゴミ出し 薬局への訪問 薬局への出勤 建物の軒先への車両の駐車
近傍を通過する人	出退勤 車両の一時停止・速度低下

a) 特定の時間で習慣的な行動をとる主体

「外出と帰宅」、「薬局へ出勤する」、「出勤」の活動には、特定の時間に頻度高く通行する・訪れるという習慣性が見受けられた。このような主体は日常的で定期的な行動をとる特徴が見出され、saoco lab. の実践を認知している可能性が示唆される。

b) 特定の設備・施設の利用行動をとる主体

観察された「ごみ収集場所へのゴミ出し」はその付近に住まう住民が日常的にとる行動であり、「薬局への訪問」は処方箋を受け取るために継続して取られる行動とも考えられる。つまり、「ごみ収集場所へのゴミ出し」、「薬局への訪問」の行動には習慣性があり、特定の設備・施設を利用する主体は、saoco lab. の実践を認知している可能性が示唆される。

4. 中間領域に対する人々の認識とその特徴

(1) アンケート調査の概要

saoco lab. の中間領域における設えと活動を手がかりに、saoco lab. に対して抱く印象について把握し、saoco lab. の中間領域だけでなく、回答者自身の家・店舗の中間領域の使い方や様相について把握するため、周辺住民を対象としてアンケート調査を実施した。表-4、表-5 にその概要と配布要領、質問項目をそれぞれ示す。

(2) アンケートの集計結果

a) 基本的属性

表-6 中に、回答者の属性の概要を示す。年齢に関して、61-70歳が最も多く、アンケート回答者全体の約70%が61歳以上であった。郡上八幡での合計の居住歴について、30年以上が59名の約81%であった。また、回答者のうちsaoco lab. の活動の存

表-4 アンケート調査の概要と配布要領

対象者	saoco lab. が位置する通りから外側に概ね二街区の範囲にある建物 (新栄町・栄町の全域と新町・大正町・榎方町・城南町の一部)
配布部数	300部
配布期間	2023年11月14日, 16日, 17日
配布方法	ポスティングまたは手渡し
回収方法	saoco lab. のポストへの投函, Google formでの回答
回収数	73部 [回収率: 24.3%] (内訳 ポストへの投函: 61部, Google form: 12件)

表-5 アンケートの質問項目

活動の認知度に関するもの
saoco lab. の活動の認知・saoco lab. の名称の認知・訪問歴
活動に対する印象に関するもの
大学の研究室の分室がまちにあることに対して感じている印象・saoco lab. の展示や活動の様子について感じている印象
活動と設えの認知に関するもの
学生の研究論文の展示/郡上竿や新聞記事の展示/まちなみ写真の展示/学生や教員の活動の様子/お話し/子どもたちとの交流/赤い消火バケツ/草花/ポスター/黒板/軒下の活動風景の11項目に関する風景体験・中間領域の使い方と様子・中間領域の使い方の変化履歴・中間領域の使い方の変化理由
回答者の属性に関するもの
年齢・居住歴・家または店の形態・まちなかでの移動手段・まちなかへ出かける頻度・まちなかへの移動目的

表-6 回答者属性・saoco lab. の認知度と来訪経験

年齢層* (73)									
10歳未満	11-20	21-30	31-40	41-50	51-60	61-70	71-80	81歳以上	答えない
0	0	1	2	5	13	25	19	8	1
居住歴* (73)									
5年以下	6-10	11-20	21-30	30年以上	答えない				
4	2	2	6	58	0				
学生が活動していることの認知に対する回答* (73)					saoco lab. の名称の認知とその情報源に対する回答*** (76)				
よく知っている	だいたい知っている	見た・聞いたことはある	知らない	知らない	ポスター	チラシ	SNS	新聞・テレビ	人づてに聞いて
22	20	10		28	13	19	1	5	13
saoco lab. の来訪経験に対する回答* (73)					建築の形態* (73)				
訪れたことがない	通りがかりにのぞいたことはある	一回だけある	二回以上ある	頻回訪	住居のみ	住居と店舗を兼ねている	店舗のみ		
36	22	5	7	3	55	18	0		

単一回答の設問に、複数回答に***を各項目の末尾に付置

表-7 saoco lab. に対する印象

大学の研究室の分室がまちにあることについての印象** (168)						
学生がいて活気が出る	まちが良くなりそう	大学生がいて新鮮な感じがする	研究活動を身近に感じる	まちなかを感じることができた	知らない人が出入りしているか不安	怖れているか分からない
42	32	44	16	7	0	21
saoco lab. の展示や活動の様子についての印象*** (108)						
活動の様子が外から見えるのが良い	軒先が賑やか	活動が楽しそう	内容が面白い	入りづらい雰囲気がある	よく分からない・あまり知らない	
22	15	19	1	17	34	

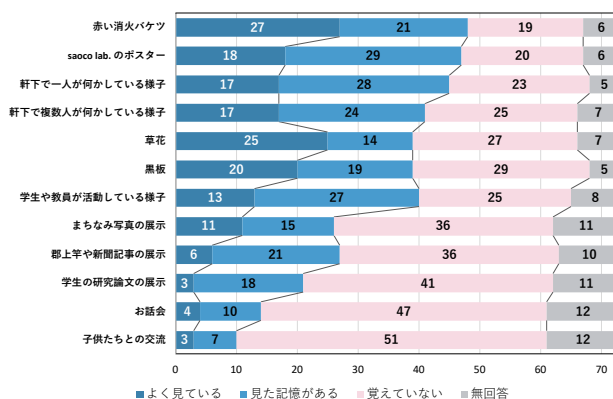


図-3 実践活動の認知に関する回答

在について少なからず「知っている」と回答していた人は全体の約86%である一方で、実際に訪問経験があるのは全体の約17%であった。

b) saoco lab. に対する印象

表-7 に saoco lab. に対する印象についての回答の内訳を示す。「大学の研究室の分室 (saoco lab.) がまちにあることについて」の印象の回答では、「大学生がいて新鮮な感じがする」が最も多かった。一方で「何をしているか分からない」の回答が 21 件あり、具体的な活動内容については十分に周知されていないと考えられる。また、「saoco lab. の展示や活動の様子について」の印象では、「活動の様子が外から見えるのが良い」の回答が 22 件あった。一方で、「入りづらい雰囲気がある」の回答が 17 件あり、入りづらさを感じている人がいることを確認できた。

c) 設えと活動に対する認知度

図-3 に具体的な設えと活動に対する認知度の回答の内訳を示す。全体の傾向として、軒下の設えと活動の認知度が高く、不特定の場所の活動、町屋の中の展示や活動の順に認知度が低くなる傾向が見られた。これについて町屋の訪問経験の有無が影響している可能性が考えられる。また、選択肢の間で突出した項目は見られず、多くの構成要素が認知に影響していたと考えられる。

(3) 印象と実践活動に対する認知の相関分析

saoco lab. に対する印象と関連が見られる中間領域での設えと活動の認知傾向を把握するために、両者の選択肢の組み合わせでファイ係数を用いて分析を行った^{[1][2]}。表-8 にそれぞれの係数値を示す。「活動の様子が外から見えるのが良い」「活動が楽しそう」「大学生がいて新鮮な感じがする」「学生がいて活気が出る」「軒先が賑やか」の印象は軒下の設え・活動を認知している人と相関が見られた。一方で、「活動の様子が外から見えるのが良い」「活動が楽しそう」「研究活動を身近に感じる」の印象は、町屋の中の設えや活動を認知している人と相関が見られた。このことから、主体が認知している設えや活動がどこに位置するかによって、抱く印象の傾向が異なること明らかになった。

(4) 認識に基づいた主体の類型とその特徴

本節では、saoco lab. への印象の傾向に着目して主体を類型化する。次いで、類型ごとに saoco lab. との関係度と回答者自身の中間領域の使い方と様相の傾向を把握する。

表-8 印象ごとの中間領域での実践活動の認知の有無の組み合わせのファイ係数

		大学の研究室の分室がまちにあることの印象						サテライト研究室の展示や活動の様子についての印象					
		大学生がいて新鮮な感じがする (n=35)	学生がいて活気が出る (n=31)	研究活動が身近に感じる (n=13)	何をしているか分からない (n=17)	まちのことを気にかけるようになった (n=5)	まちが良くなりそう (n=23)	活動の様子が外から見えるのが良い (n=16)	活動が楽しそう (n=14)	軒先が賑やか (n=14)	入りづらい雰囲気がある (n=13)	よく分からない・あまり知らない (n=28)	
町屋内の出来事	お話し会(n=13) 子供たちとの交流(n=10)	0.15	0.14	0.40	-0.19	0.29	-0.03	0.49	0.26	0.07	-0.01	-0.31	
町屋内の展示	学生の研究論文の展示(n=18) 郡上芋や新聞記事の展示(n=23)	0.29	0.22	0.34	-0.21	-0.03	-0.09	0.49	0.39	0.22	-0.02	-0.40	
不特定の場所の設え・活動	まちなみ写真の展示(n=20) 学生や教員が活動している様子(n=31)	0.10	0.28	0.29	-0.42	-0.09	0.29	0.60	0.34	0.25	-0.33	-0.39	
軒下の設え	草花(n=30)	0.40	0.33	0.32	-0.20	0.12	0.15	0.48	0.43	0.51	-0.03	-0.50	
	赤い消火バケツ(n=39)	0.30	0.30	0.16	-0.26	0.29	0.29	0.34	0.11	0.37	0.08	-0.39	
	saoco lab. のポスター(n=37)	0.26	0.24	0.17	0.00	0.20	0.20	0.23	0.10	0.01	0.07	-0.23	
軒下の活動	黒板(n=31)	0.36	0.25	0.21	-0.20	0.22	0.22	0.36	0.41	0.32	-0.07	-0.45	
	軒下で一人が何かしている様子(n=35)	0.40	0.33	0.23	-0.20	0.02	0.02	0.40	0.35	0.43	0.06	-0.50	
	軒下で複数人が何かしている様子(n=32)	0.37	0.40	0.24	0.01	0.11	0.11	0.40	0.27	0.35	0.15	-0.52	
		0.36	0.37	0.21	-0.15	0.14	0.14	0.46	0.33	0.50	-0.05	-0.46	

* ±0.0~0.25 : ほとんど相関がない, ±0.25~0.5 : やや相関がある, ±0.5~0.75 : かなり相関関係がある, ±0.75~1.0 : 強い相関関係がある

表-9 類型ごとの saoco lab. に対する印象の特化係数

クラスター	人数	大学の研究室の分室がまちにあることの印象						サテライト研究室の展示や活動の様子についての印象						
		大学生がいて新鮮な感じがする	学生がいて活気が出る	まちのこを気にかけるようになった	研究活動が身近に感じる	まちが良くなりそう	何をしているか分からない	活動の様子が外から見えるのが良い	軒先が賑やか	活動が楽しそう	入りづらい雰囲気がある	よく分からない・あまり知らない		
CL1	28	25	24	5	12	15	1	0	22	14	16	0	3	1
		1.55	1.42	1.86	1.96	1.22	0.12	0.00	2.61	2.43	2.20	0.00	0.46	0.08
CL2	18	8	11	1	0	2	15	0	0	1	1	1	13	7
		0.77	1.01	0.58	0.00	0.25	2.90	0.00	0.00	0.27	0.21	0.00	3.10	0.83
CL3	15	9	9	0	4	13	0	0	0	0	2	0	1	14
		1.04	1.00	0.00	1.22	1.98	0.00	0.00	0.00	0.51	0.00	0.00	0.29	2.00
CL4	12	0	0	1	0	2	5	6	0	0	0	0	0	12
		0.00	0.00	0.87	0.00	0.38	1.45	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	2.15

* 上段が観測度数, 下段が特化係数を表す。期待値が1を下回るものは可読性のため空欄

表-10 類型ごとの設え・活動の認知割合

クラスター	人数	町屋内の出来事				町屋内の展示物				不特定場所の設え・活動				軒下の設え				軒下の活動	
		お話し会	子供たちとの交流	学生の研究論文の展示	郡上芋や新聞記事の展示	まちなみ写真の展示	学生や教員が活動している様子	草花	赤い消火バケツ	saoco lab. のポスター	黒板	軒下で一人が何かしている様子	軒下で複数人が何かしている様子	軒下で一人が何かしている様子	軒下で複数人が何かしている様子				
CL1	28	11	8	16	18	20	25	23	21	26	25	25	25	24					
		39.3%	28.6%	57.1%	64.3%	71.4%	89.3%	82.1%	75.0%	92.9%	89.3%	89.3%	89.3%	85.7%					
CL2	18	2	0	4	3	1	7	10	13	13	10	13	10						
		11.1%	0.0%	22.2%	16.7%	5.6%	38.9%	55.6%	72.2%	72.2%	55.6%	72.2%	55.6%						
CL3	15	1	2	1	4	3	6	5	10	7	4	6	6						
		6.7%	13.3%	6.7%	26.7%	20.0%	40.0%	33.3%	66.7%	46.7%	26.7%	40.0%	40.0%						
CL4	12	0	0	0	2	2	2	1	4	1	0	1	1						
		0.0%	0.0%	0.0%	16.7%	16.7%	16.7%	8.3%	33.3%	8.3%	0.0%	8.3%	8.3%						

*上段が観測度数, 下段が類型ごとの割合を示す。

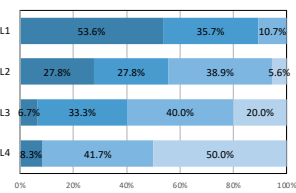


図-4 類型ごとの saoco lab. の活動の認知度

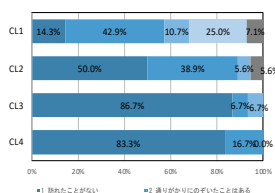


図-5 類型ごとの saoco lab. の訪問経験

a) 類型ごとの saoco lab. との関係度

まず, saoco lab.に対する印象に関する回答項目を説明変数として k-means による非階層クラスター分析を行い^[3], 4 類型を得た。表-9 に類型ごとに抱いている印象の回答の特化係数^[4]を示し, それぞれの類型ごとの抱いている印象の特徴を以下に解釈する。

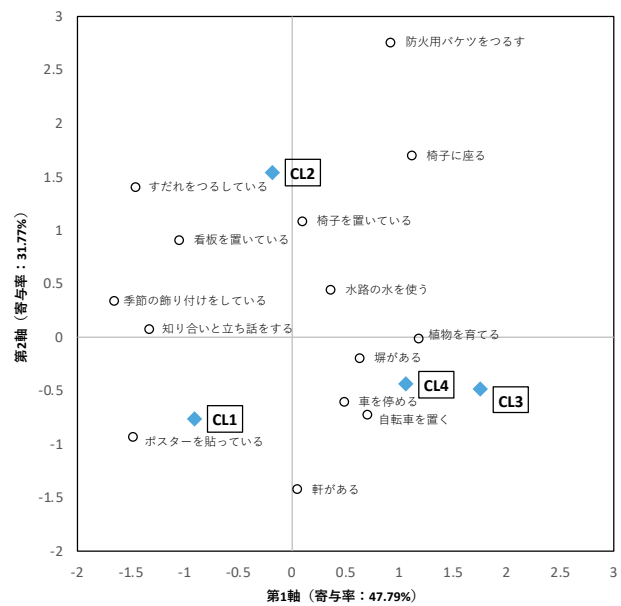


図-6 コレスポンデンス分析による各類型と中間領域の様相の布置

- CL1 : 複数の選択肢に回答しており, 印象が具体的な類型
- CL2 : 「何をしているか分からない」かつ「入りづらい雰囲気がある」と捉える類型
- CL3 : 「よく分からない」一方で「まちが良くなりそう」と捉える類型
- CL4 : 「よく分からない」が多く, 具体的な印象を抱いていない類型

次いで, saoco lab.との関係を説明するため, 活動を認知している人の割合を表-10 に, saoco lab.の認知度と訪問経験の有無について図-4, 5 に示した。これらを類型ごとに抱いている印象と照らし合わせ, 類型間で比較すると, 具体的な印象を抱いている主体(CL1)は, 活動の認知度や訪問経験があり, saoco lab.との関係度が高い傾向があることが示された。

b) 類型ごとの中間領域の様相の傾向

類型ごとの回答者自身の家・店舗の中間領域の様相についての回答のクロス集計からコレスポンデンス分析を行い、その散布図を図-6に示す。各類型が1・2軸上で距離を置いて配置されるとともに、類型の構成主体の中間領域の様相に類似する要素が配置された。CL1の周辺には「知り合いと立ち話をする」「季節の飾り付け」「ポスターを貼っている」など住居内で可能な行為が配置され、それらが建物外にあふれ出した様相が窺える。CL3・4の周辺には「自転車を置く」「車を停める」といった一般的に建物外部でのみ行われる行為が配置され、建物外部に私的な活動は表出しにくいと考えられる。

これらのことから、類型ごとに中間領域の使い方には異なる傾向を把握でき、抱いている印象が具体的な主体は、中間領域を私的な活動が許容される空間と捉えていたと示唆される。

5. 結論

(1) 本研究の成果

まず、アンケートの回答から回答者の基本属性とsaoco lab.に対する印象、実践活動に対する認知度を概観し(4-2節)、印象と認知度の組み合わせの単相関分析によって、実践活動を認知することが主体の抱く印象に影響を与えていることを把握し、主体が認知している設えや活動の位置によって、抱く印象の傾向が異なること明らかになった(4-3節)。次いで、印象の具体度が異なる4類型を抽出し、類型ごとの訪問経験や活動の認知度との関係から、saoco lab.に対する認識の実態を把握した。その結果、saoco lab.に対する印象が具体的な主体は、saoco lab.に対する認知度が高く、訪問経験があることを明らかにした(4-4節 a)。また、自身の住居の中間領域の利用傾向の相違とsaoco lab.に対する印象の具体度に対応が見られる傾向を明らかにした(4-4節 b)。

(2) 考察と今後の展望

本研究は、まちの住民と私的空間にある人をつなぐために自由で開かれた空間を目指し、そのプラットフォームとしての中間領域のあり方に対する問いが出発点であった。研究の成果から、軒下での実践を認知している主体ほどsaoco lab.への印象が具体的に示され、公的空間に向けて私的空間に属する個人の生活の様相やふるまいが現われる中間領域の特質を確かめられたと言えるだろう。

また、中間領域を私的な活動が許容される空間と捉える主体について考察する。その主体にとって内

と外の境界は曖昧で、中間領域をまちとのつながりを持つ空間と捉える感覚が日常的に体得されていたと考える。地域住民の中間領域の積極的な私的利用とsaoco lab.に対し具体的な印象を抱くことの対応が見られ、その主体にsaoco lab.の訪問経験がある人が多くみられたという傾向は、体得している感覚により中間領域における偶発的なコミュニケーションや出逢いが生まれた証左であるといえないか。

中間領域のあり方を考えるとき、開かれた空間にするための努力が必要であると同時に⁸⁾、中間領域をまちとのつながりを持つ空間と捉える主体の感覚も必要であり、またその空間に継続的に接触するようなライフスタイルを自然と生起させるまちの構造やソーシャルイノベーションが必要であると考えられる。引き続きsaoco lab.での実践を続け、まちに開かれた中間領域のあり方について模索したい。

<補註>

- [1] ファイ係数(φ係数)はクロス集計表における行要素と列要素の連関の強さを示す指標である。係数値は-1~1間の値を取り、その解釈は表-8に準ずる。
- [2] 実践活動の認知の有無については、「よく見ている・見た記憶がある」と「覚えていない」の二値に分類し、0.1のデータに変換している。
- [3] 非階層クラスター分析においてクラスター数を複数指定して検討し、各クラスターの特徴が最も反映されていると考えられるクラスター数4を採用した。
- [4] 特化係数は次式で求めた。これは各類型における期待値に対する観測値の割合を示している。

$$\frac{\text{各類型における該当の印象の選択数}}{\text{該当の印象項目の選択数} \times \text{類型に含まれる人数}} \div \text{全体の人数}$$

<参考文献>

- 1) 一海有里, 清水忠男, 佐藤公信, 陳明石, 住宅街路における公私間の仕切り方が人々に与える心理的影響, 日本建築学会計画系論文集, 64巻, 526号, pp.215-222, 1999
- 2) 渡辺万紀子, 天野光一, 西山孝樹, 街路空間における中間領域の類型化とその構成要因に関する研究, 土木学会論文集 D1 (景観・デザイン), 77巻, 1号, pp.17-32, 2021
- 3) Hertzberger, H.: *Lessons for Students in Architecture*, 010 Uitgeverij, 1991.12
- 4) 陳明石, 清水忠男, 佐藤公信, 一海有里, 騎楼空間における仮設的要素の使われ方と人々の認識, 日本建築学会計画系論文集, 65巻, 528号, pp. 171-178, 2000
- 5) 郡上市: 郡上市八幡都市計画マスタープラン (第二期), 2016
- 6) 焔場星澄: 郡上八幡における町並みの変遷実態とそのメカニズムに関する研究, 早稲田大学修士論文, 2022
- 7) 佐々木葉: まちにいる・まちにひらく 郡上八幡 saoco lab.の120日, 土木学会 景観・デザイン研究講演集, No.18, pp.350-357, 2022
- 8) 佐々木葉: 風景体験の楽しみとレッスン, 土木学会 景観・デザイン研究講演集, No.19, pp.283-288, 2023